

過去の両親からの受容および現在の家族関係が青年の心理的適応に及ぼす影響の検討
——Parental Acceptance-Rejection Theory によるアプローチ

Rohner (1986) により提唱された Parental Acceptance-Rejection Theory (PARTheory) では、幼少期に両親から受容されていたと認知しているほど現在心理的適応の状態にあることが報告されている (Khaleque & Rohner, 2002; Rohner & Khaleque, 2010)。PARTheory において規定される心理的適応は敵意 / 攻撃性, 依存, ネガティブな自尊心, ネガティブな自己充足, 情緒的無反応, 情緒的不安定, ネガティブな世界観の 7 つの側面に分類されている。

本研究の目的は、PARTheory において使用される Adult Personality Assessment Questionnaire short form (Adult PAQ short form) の日本語訳および信頼性・妥当性の検討を行うこと (研究 I)、親子関係が心理的適応に及ぼす影響を検討すること (研究 II) であった。得られた結果は以下の通りであった。

研究 I では、Adult PAQ short form の日本語訳および信頼性・妥当性の検討を行った。その結果、42 項目のうち 23 項目をもって日本語版 Adult PAQ short form として採用することとした。各下位因子の信頼性および併存的妥当性はおおむね十分な値が認められた。

研究 II では、幼少期の両親からの受容が現在の両親からの精神的自立を媒介して心理的適応に及ぼす影響を検討した。分析の結果、心理的適応の中でもネガティブな自尊心, ネガティブな自己充足, ネガティブな世界観については、幼少期の両親からの受容が現在のそれぞれの親との信頼関係を高め、その結果心理的適応を規定するという媒介モデルが支持された。一方で、敵意 / 攻撃性に関しては、幼少期の父親と母親の双方からの受容が直接的に負の影響を及ぼすことが明らかとなった。